

春へ

宮坂静生

愛媛県内子四句

和蠟燭工房春へ春へ燭



檻の実のつぶさるるまで鉄鍋に
木蠟を芯に塗りこめ蟬知らず
たくらみはなきか内子座冬の奈落
亥の子突き大黒さまは真つ黒け

闘牛の闘志不発になだめて冬
三十石船や湾処の冬紅葉

淀川

獅子舞やここが枚方鍵屋浦

珈琲に胃の腑を緊めて枯れきらず

柚子風呂に寝入り狐に起さるる

先生のポケットいくつ冬雀

草枯の轟音満つる佐久平

冬眠の泉はこのもかのもから

病む者の智者に近づく小晦日

冬麗の泉さがしに行つたきり

悼新井みちをさん



時雨は信濃が北限か —— 地貌季語への愛

宮坂 静生

いくたびも論じながらまだ説きたい思いがある。俳句はなにを詠うかである。古くてつねに新しいテーマ、地貌を見つめることに関してである。

かねて気になっていたのであるが、最近、妙に信州の初冬の「時雨」が気になる。どう気になるのか。いやな雨だなとの思いが強い。松本辺は年間を通して日照率は日本一。雨が少なく、晴れる日が多い。ところが、初冬はどうしたことか天候がわびしい。じとじと来て間もなく上がり、ときには本の町だと東に横たわる美ヶ原高原の王ヶ鼻辺りが寒々と見えるが明るくない。間もなく冷蔵庫の中に閉じ込められるような冬が来る。その先触れが信州の時雨に違いない。

真冬の信州は寒くても快晴の日が多く、わびしさなど感じない。かんかんとひびくよう寒い。これは腹をくればむしろ快い。ところが、時雨降る初冬がいけない。暗い檻に閉じ込められたような気分になる。

そこで、はたと氣付いたのが、宗祇の発句である。

世にふるもさらに時雨の宿りかな 宗祇

室町末期の連歌師宗祇（一四二一～一五〇二）の名高い時雨の句だ。この句に「其比、信濃にて」と前書がある。

「其比」とは時雨が降る頃の意か。時は戦国の世。越後の

雨と呼ばれる初冬の明るい「降りみ降らずみ定めなき」雨、時雨がこんなにも違うとは驚きである。時雨という「季題」の信濃の時雨はぎりぎりのところに位置するのではないか。みちのくの時雨、ましてや蝦夷の時雨などは考えにくい。雨が降ってもそれは時雨ではなく、単なる冬の雨だ。時雨と称して信濃が北限、私はそんな思いに最近囚われている。宗祇の句は見事にそれを暗示している。

ここで話題を広く一般論に転じ、本意を問題にしたい。

かつて飴山實が俳句は季題の本意を詠うものだといった。

本意はいきものであり、時代とともに変わるものだともいう。この僅かな透明なことは一見名言のように思われる。間違ってはいない。が、飴山流の俳句を信奉すれば、極めて限定された狭いものになる。

平安貴族の本意とは限られた自分たちが好んだい感じを与える美しさの意識である。そこではことばの意味が和歌を詠むことで洗練され、暗黙の美しさへの感受性が尊重される。例えば、時雨は「晚秋から初冬にかけて山城盆地などでぱらぱら降る雨」。これは自然界の時雨の意味。本意は「降りみ降らずみ定めない雨に人生の定めない儂さを意識する」。

自然現象の初冬の雨にこのような人生観を滲ませた意識を持つことで初めて王朝の住人に遇されるのである。

飴山がいう季題は、時雨に代表されるような本意を持った季節のことばを念頭においているであろう。だが、私は、時雨にしても季題のルーツは山城盆地に住んだ平安貴族の美意識から生まれたものではないと考えている。あえていうなら

上杉家に情報提供をするため頻繁に信濃を行き来していた宗祇である。どことはいわない。「信濃にて」と前書を付けてくださっただけでもありがたやありがたやの一句。とはいえたが、「時雨の宿り」とある。句は街道筋風情。

「世にふるも」は人の世のしがない渡世を重ね、このたびはいちだんとわびしい信濃の時雨に降り込められたことくらいの意。「ふる」は降ると古の掛詞が常套文句だけにかえって、個人の気持を超えた、どうしようもないトンネルの中に入ったような無常感に貫かれている。沈んだ句だ。

この句は、都の時雨を詠んだ評判の歌「世にふるは」を踏まえて詠われていることは周知である。

世にふるは苦しきものを檻の屋にやすくも過ぐる初時雨かな

二条院讃岐（『新古今集』）

王朝末期の乱世に生きる女の苦しさなんか知らない、といふ風にぱらぱら過ぎてゆく山城盆地のしぐれのつれなさを詠う。軽く無情な明るさに恨みさえ感じる。これが平安貴族の好んだ時雨の代表歌である。

王城の地京都のつれなくも明るい時雨に対し、東国である山国信州の暗く陰鬱な時雨は、時雨の対極である。同じ時

ば、この島国に住み着いた丹後の猟師（百姓）や信濃の山人などが長い生活体験の中で培ってきた季節の知恵の結晶、いふならば地貌の季節のことばが背景にあって生まれたものであろう。季語のルーツは地貌季語に行きつくのではないか。「大唐帝国」（唐の植民地）であった日本とは西郷信綱のことばであるが、日本がやがて独自な国作りを進める中で、日本国日本語のプロである平安貴族によってナショナリズムが盛んになる西暦一〇〇〇年頃に選ばれたことばが季語の卵「歌語」である。

本意とは「ある題材が本来備えている、最もそれにふさわしいと考えられる性質や意味」（『精選版日本国語大辞典』）、「本来あるべきさま。本義」（『広辞苑』）との考え方もある。われわれが俳句を詠む時には季語ばかりではなく、詩歌のことばに関するすべてこのよのうな意識を働かせていく。例えば、

前の世に蒔きしコスモス剪りにけり 柏田 浪雅

コスモス忌てふ名を汝に捧ぐべし 古畑 恒雄

とコスモスを詠う。明治二十年代にメキシコ原産のコスモスが日本に入ってくる。ギリシャ語の宇宙を意味する八個の舌状花が二メートルほどの茎頂を開く。清楚な美しい花だ。これはコスモスの意味である。掲句はコスモスを前世からの花と見、また亡き人を讃えるにふさわしい美しい花と感じた。俳句でコスモスを詠うときには意味を手掛かりに、その触発された詩情を詠う。季語の本意を詠うものとは思わない。季題でも季語でも本意に限るのは狭い。もっと自由自在に偶然に奔放に詠うのではないか。